

## 腐り切った組織の実態を継続してウオッチする 第三十八弾

## 神社本庁再生への道—その一

## 神道人は社会の師表たれ

## —この危機を改革と再生の転機とせよ

## 藤原登(フリーライター)

コロナ禍が続く中で令和三年の新春を迎えた。社会が危機に陥っても、人々が不安になるうとも、時間は確実に流れてゆく。命あるものが衰え死しても、必ず新しい生命が生まれてくることを思えば、私たちは日々、未来へつなぐ魂を持って生きていくのかを問い続けなければならぬ。

日本は今、危機的状況である。

政府はg o o t o キャンペーンを強行してきたその口で飲食店に時短営業を要請し、再度の緊急事態が宣言されると今度は外食自体を自粛しろという。すべて場当たり的な対策の繰り返しであるが、メディアも個別の事象を取り上げては、専門家のコメントを垂れ流すだけの報道を繰り返している。戦後の政治や言論の空間は歪んでいるだけでなく、品質の劣化も著しい。同時に、これを許してきた現代日本人の弱点を見事に浮かび上がらせている。

七十五年前の日本は、大東亜戦争の敗戦下にあった。困難の

度合いは今日の比ではない。しかし当時の日本人は、この未曾有の危機を乗り越えてきた。今、迫りくる危機は、間違いなく日本その後の来し方由来するものだ。政府与党内での調整や駆け引きが最優先される状況で、まともなコロナ対策ができるはずはないが、この状況に対する国民の無力感こそ、コロナの蔓延以上の危機である。

## 三月十八日の地裁判決が、神社本庁再生の契機となるか

コロナ禍がはからずも日本社会の劣化の状況と国民の弱点を炙り出したが、それがより深刻になるとどうなるか、鏡のように映し出しているのが、本稿の主題である神社本庁の現状だ。全国に約八万ある神社を包括し、その適正な運営を指導する立場でありながら、田中恆清総長と、盟友である打田文博神道政治連盟会長のツートップによる組織の私物化が今も続いている。この二人が職員職舎の廉価売却など、数々の不正行為に手

を染めてきたのだ。しかしここで、全国各地の神道人が目覚まし、神社本庁が正常化へ舵を切るなら、日本再生へのさきがけになると考える。

神社本庁の憲法である「神社本庁憲章」において神職は、品性を陶冶して、社会の師表たることを心がけるよう求められている。ところが神社本庁は、同じ師表でも「ウラ社会の師表」であった田中一打田両氏をトップに担ぎ出してしまった。日本の伝統文化を代表する神社界がこれでは、社会が壊れてゆくしかない。

であるから筆者は、本紙を通じて全国の神道人に訴えてきた。神社界の組織は清浄でなければならぬ。神社本庁が自浄することが、日本社会が再生する最低の条件だ。このままでは政治は乱れ、世の中も混沌となる一方である。このことは、神道人であるなら誰でも強く認識しているはずだ。

昨年十二月号で報じた通り、本年三月十八日に東京地裁で、元部長の稲貴夫氏、瀬尾芳也氏兩名が神社本庁を提訴していた地位保全裁判の判決が下される。二人が神社本庁から懲戒処分を受けた理由は、職員職舎の売却で不正が行われたことを内部告発したためであったが、不正行為が事実であったことは三年にわたる審理で明らかにされてきた。処分は無効であるとの判決が下されれば、愈々神社本庁正常化のために力が結集される契機となる。

五箇条の御誓文を道標にせよ  
天皇陛下は本年元旦、コロナ禍により中止となった新春一般参賀に代えて、ビデオメッセージを国民にお伝えになった。陛下は、幾度も試練を乗り越えてきた人類の歩みに触れた上で、この難局にあっても将来を信じ、「皆が互いに思いやりを持つて助け合い、支え合いながら、進んで行くことを心から願っています」とのお言葉を述べられた。

このメッセージを七十五年前の元日に渙発された「新日本建設に関する詔書」と重ね合わせ、拝聴した読者も多いことだろう。「人間宣言」と誤称されるこの詔書の目的が、その冒頭に掲げられた「五箇条の御誓文」であったことを後に昭和天皇が会見で述べられている。

神社本庁の正常化は、この五箇条の御誓文の精神を挺して遂行して欲しいと心から願う。それは、神社本庁の再生への道筋とその成否は、様々な形で外部にも影響すると考えるからだ。神社界だけの問題として解決できると、拙速に進めてはいけない。人材の育成と登用が要となるが、以下の通り、五ヶ条の御誓文に示された維新の理念がその道標になるだろう。

「一 廣く會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ」  
今までは、ルールを無視した茶番に等しい会議が続いている。そんなことはもう許されない。真剣な討議がなされれば、そこに私利私欲が入り込む余地はない。

「一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ」  
田中一打田体制において人事が私物化されてきた。これで

は心一つにして業務を遂行できない。まずは人事の刷新からだろう。

「一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス」  
神職身分制度のお手盛り運用を廃し、神社の護持と社会の発展のために神道人それぞれの志が実現しうる体制を目指さなければならない。

「一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ」  
神社本庁には陋習が山ほどあると思われる。神職に社会の師表を求めるなら、コンプライアンス重視の組織運営は当然である。

「一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ聖基ヲ振起スヘシ」  
社会の進展を通して神職にも新しい知識や能力が求められるのではない。また、これまでの神職教育の中に、今日の事態をもたらした原因はないか。教育システムの総点検が必要だろう。

日本再生への新風を神社界から吹き込むためにも、祭祀を司る神道人が一念発起し、まずは神社本庁を長年蝕んできた邪気と弊風を祓い除けてほしい。そのためには維新回天を成し遂げんとする気構えが必要であるが、来るべき日のために進んで身を投じられるよう、日頃の鍛錬に怠りなきことを願う。